慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アジア・アフリカ・ブロックと国際連合:その投票行動の研究
Sub Title	Afro-Asian bloc and the United Nations : a study on its voting
	behavior
Author	松本, 三郎(Matsumoto, Saburō)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication	1964
year	
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and
	sociology). Vol.37, No.7 (1964. 7) ,p.39- 74
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara _id=AN00224504-19640715-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アジア・アフリカ・ブロックと国際連合

— そ の 投 票 行 動 の 研 究——

AAブロックの形成

松

本

郎

序 論

四三 Ŧī.

語

AAブロックの国連における団結 AAブロックの国連における地位

序

にはAAブロックは二八ヵ国となり、総会加盟八一ヵ国の三分の一を越えるに至つた。この国連におけるブロックの増加、(1) 一九五五年十二月のいわゆる一括加盟以来アジア・アフリカ地域諸国の相次ぐ国連加盟により、一九五六年の第一一総会

特にAAブロック内中立主義諸国の増加と、そのハンガリー事件、植民地問題等に対する強硬な態度などに刺戟されて、西 AAブロックに対抗してのブロック化現象が目立つた。この国連における西側へゲモニー崩壊の脅威に直(2)

側諸国の間には、

アジア・アフリカ・ブロックと国際連合

三九

(七八三)

四〇

団投票)についての議論が盛んに行われるようになつた。 旧植民地勢力の増大と西欧勢力の相対的後退という、 このような 国際社会における重大な歴史的発展を背景として行われた欧米の新聞雑誌におけるブロック・ヴォーティングに対する論調 面して、国連総会を場とする国際政治において地域的ブロックの意義が認識され、いわゆるブロック・ヴォーティング(集(3)

が、多く批判的で、AAブロックがそれを乱用することを非難してきたのは当然といえよう。 しかし、ブロック・ヴォーティングは、地理的接近、経済的政治的軍事的利害の共通性、文化社会的同類性などによつて

に認識させるに至り、爾来国連における国際政治は、このブロック・ヴォーティングの現実を無視しては理解しえなくなつ る利益集団間の勢力の接近は、総会の権限の著しい増大と相俟つて、集団行動による目的達成の有利且つ便利なことを一般 重要視されなかつたということは、当時は対立する利益集団間の勢力の差が非常に大きかつたため、ブロック・ヴォーティ 利害を同じくする国々が、投票に当つて同一行動をとることによつてその国の利益を確保することを目的とするものである ングによる力の結集の必要性が余り認識されなかつたことによる。しかるに、国連加盟国の急速な増加のもたらした対立す その功罪は別として本来必然的な存在理由をもつていたのであり、それが国際連合において一九五五年頃までそれ程

に働き、国連全体の動きに重要な影響を与えてきた。従つて、われわれは先ず第一に、国連におけるブロック・ヴォーティ caucusing group)とよばれる利益集団である。総会、安保理事会といつた国連の公式な機構の中で、この非公式な組織は活発 グの背景となる協議グループの形成過程を観察してみる必要がある。 このようなブロック・ヴォーティングの背後にあるのが、協議ブロックもしくは協議グループ (caucusing bloc or

台とする国際政治にいかなる影響を与えてきたかの点を検討する必要がある。筆者もそのような点に着目しつつ、日本の加 第二にわれわれは、 その協議グループが、国連において従来いかなる結束を示してきたか、またその結束は国連総会を舞

						123										
ブロック	度	原加 盟国	46	47	48	49	50	54	55	56	57	58	60	61	62	63
アシア・アリカ	フ	11	13	15	16	16	17	17	23	27	29	29	46	50	54	57
東南アジア(含日本)	7	2	4	5	6	6	7	7	11	12	13	13	13	13	13	13
中近東	Į	6	6	7	7	7	7	7	8	8	8	7	8	9	9	10
7777	5	3	3	3	3	3	3	3	4	7	8	9	25	28	32	34
アラブ連盟	4	5	5	6	6	6	6	6	8	11	11	10	10	11	12	13
軍事同盟								3 SEATO	6 мет о	7 日本	7	6	6	6	6	6
中南	米	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	22	22
西	欧	7	9	9	9	9	9	9	15	15	15	15	15	15	15	15
	圏	6	6	6	6	6	6	6	10	10	10	10	10	11	11	_11
アメリカ・ ギリス	7	7	7	7	7	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
計		51	55	57	58	59	60	60	76	80	82	82	99	104	110	113

注 アメリカ・イギリス・ブロックは、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリ ア、ニュージーランド、南ア、イスラエル、中国から構成される。モンゴリアは、

共産圏ブロックに属する。 みたい。 ガリ 題の ے

民問題のような「人権・人種関係」 植民地問題」 投票二七、 アルジェリア問題、 南アのアパルトヘイト問題、 に関する投票五三、「軍縮・ の投票一六、 パ レスチナ難 および

第一八総会一七である。この一六○の投票サンプルを問 第一二総会二二、第一三総会一九、第一四総会一九、 た第一八総会に至るまでの八つの国連通常総会の中か 中で日本が加盟した第一一総会から、昨六三年に行わ み触れることとする。 連におけるブロック・ での八つの国連通常総会における投票をもとにして、 盟した第一一総会から昨年行われた第一八総会に至るま 一五総会二七、第一六総会二七、第一七総会一五および 一六〇の投票サンプルを選んだ。(9)(10) 事件別、 の研究のために、筆者は一九五六年一二月に会期 問題のような「紛争の平和的解決」に関する投票 紙面 内容別に分類してみると、朝鮮問題、 [の都合で本論ではAAブロックについての(?)(8) ヴ オーティングの実態を分析して 南西アフリカ問題 のような 即ち第一一総会一四、 核兵器関係」 ハン 玉 第 b

ZЦ

中国代表権問題 韓国加盟問題、 安保理事会の議席増加問題のような「その他」の分類に属する投票三三から成る。

- (1)「ブロック、グループ或はキャンプなどは、 屢々混同して用いられ、 AAブロックはAAグループともいわれて事実上ちがいはないようで ブロックとよぶことにした。 行わず、便宜上もつとも大きな集団としてアジア・アフリカの総体を指す場合にはブロック、その内部的諸集団はすべてグループまたはサブ・ 義に従えば、現在国連でブロックと呼びうるのはソ連ブロックのみで、他はすべてグループとなるのであるが、本論文では両者の厳密な区別は 定をしないグループと区別している(Hovet, Thomas, Jr.; Bloc Politics in the United Nations, N. Y., 1960, pp. 30-31.)。このホベットの定 ック政治」・国際法外交雑誌第六十巻第二号一七頁)。 またホベット教授は、国際連合におけるブロックを定義して、「ブロックとは、定期的会合 あるが、厳格にいうならば、ブロックの方がグループよりも結束度がつよいものをいうといつて差支えない」(内山正熊「国際連合におけるプロ 総会における投票ではその会合の決定に拘束される国家集団」とし、共に会合をし話し合いをしても、投票について拘束するような決
- (2) 前掲ホベットの附表一九、二五、三一、三七、五三等参照。
- であつた」と述べている(O'Brien, Conor Cruise; To Katanga and Back, a U. N. Case History, London, 1962, p. 22)。 動的三分の二獲得は、以前程楽ではなかつたとはいえなお可能であつた。真に安全な三分の二がアメリカの手にあつた最後の年は、一九五七年 西側の危機の時期を一九五八年以後に求める者もいる。例えばオブライエンは、「一九五五年の一括加盟以来、 アメリカの総会における自
- 5 Nicholas, H. G.: The United Nations, as a political institution, London, 1959, p. 52 ff. (後の特別政治委員会)の設置、一九五○年第五総会における「平和のための統合決議」の採択等は、 総会の権限の著しい増大を意味した,See 安保理事会の継続的行詰りは、総会による安保理事会の任務の一部代行をもたらした。一九四八年第三総会以後の総会アド・ホック委員会

長坂二郎、江見三郎「国際連合における地域グループ」(外政・第一一号・一九五九)参照。

4

- 6 文、それに筆者の「国連における日本の投票態度」(国際政治・国連と日本外交・一九六四)がある程度である Assembly," International Organization, 5 (Feb., 1951), pp. 3-31.》がこれに先鞭をつけ、次いでホベット教授が前掲書および、 United Nations, 国連におけるブロック政治の研究については未だ極めて不毛であつて、僅かに欧米では《Ball, M. Margaret; "Bloc Voting in the General N. Y., 1963.》 でその実証的分析をつづけているのみで、またわが国では、 長坂、江見両氏の前掲論文、 内山教授の前掲論
- ア・アフリカ・ブロック、中南米ブロック、西欧ブロック、共産圏ブロック、アメリカ・イギリス・ブロックの五つのブロックが存在し、 国連に「いかなる」あるいは「いくつの」ブロック乃至はグループがあるかを明白に決定するのは困難である。しかし、基本的には、 その内部がそれぞれの利害関係に従つて更に幾つかのサブ・ブロックに分れていると考えることができよう。国連に存在する主要な協議グ アジ

ループについては、See Hovet, Bloc Politics in the U. N. p. 47 ff.

- 8 AAブロック以外の諸ブロックの投票分析については、 日本国際連合協会編「国連論叢」に近く発表する予定である
- (9) サンプルの選択に当つては次のような基準に従つた。
- るが、このうち全加盟国で構成されるのは総会のみであること、また国連が活動するすべての分野の問題を審議するのは総会だけであること から、総会における投票から選ぶ。 国際連合は、周知のごとく六つの主要機関(総会、安全保障理事会、経済社会理事会、信託統治理事会、 国際司法裁判所、 事務局)
- 2 この総会は、本会議と七つの主要委員会から成るが、本研究では対象を政治問題にしぼり、それに関係の深い本会議と、第一(政治、安全 保障)、特別政治、 第四(信託統治、 非自治地域)の三委員会の計四つの機関における投票の中から選ぶ。
- 投票が行われ、このうち指名投票に付されたものは約二〇%である(Hovet, Africa in the United Nations, p. 108.)。 ころによると、第一総会から第一六総会までについての調査では、国連総会の本会議および七つの主要委員会では、毎会期平均約八○○回の の投票では確認が困難であるので、サンプルは指名投票の中から選ぶこととした。ホペットが前掲「国連におけるアフリカ」で述べていると 致投票 without-objection votes のいずれかに属する。しかし、重要な議案は原則として指名投票に附されるのが常であり、またその他の形式 次に投票の種類についてであるが、国連総会における投票は、指名投票 roll-call votes、挙手による投票 show-of-hand votes および全会一
- その中でもつとも重要なものをとる、엤手続事項の投票、重要性の少ない投票、或は全会一致に近いものは省略する等の「調整」を行つた。 の投票が重複した場合には、原則として本会議の投票を採用する、回多くのバラグラフに分れて、パラグラフ毎の投票が行われる場合には、 整されたもの」をとるかが問題となる。「すべて」を採用した場合に考えられる種々の欠陥を避けるため、 本研究では、 ()本会議と各委員会 かくして、総会の上記四つの機関における指名投票の中からサンプルを選ぶのであるが、つぎにこの指名投票の「すべて」 をとるか、「調
- 従つて筆者自身の判断で選択した。また外務省国際連合局政治課編「国際連合総会の事業」も参考にした。 サンプルは"The United Nations, Official Records" および "The United Nations, Provisional Verbatim Records"の中から、 右の規準に

一 AAブロックの形成

章に署名し、 国連憲章第三条は、「サンフランシスコ会議の参加国、 且つ批准した国」 を原加盟国と規定した。この結果、 または一九四二年一月一日の連合国共同宣言の署名国で、 一九四五年十月十五日に憲章に署名したポーランドを最 この憲

アジア・アフリカ・ブロックと国際連合

(七八七)

四三

四四四

後として、五一ヵ国が原加盟国として国連に加盟することになつたが、このうち今日アジア・アフリカ諸国と一般に呼ばれ 六ヵ国 (トルコ、イラン、レバノン、イラク、シリア、サウジ・アラビア)、 ア フ リ カ三 ヵ国(エジプト、エチオピア、リベリア)である。 ているグループに属する国は、 AA 地域の国連内での地位は非常に低く、 一九四六年 一月 に安保理事会非常任理事国選出について結ばれたロン わずか一一ヵ国、 全体の二二%であつた。 東南アジアニョ国(インド、フィリピン)、 中近東

ドン紳士協定においても、中近東地域に一議席が割り当てられたのみで、東南アジアやアフリカの存在は全く無視されてい

である。更に、AAブロック五七ヵ国の構成も、東南アジア一三、中近東一〇、アフリカ三四となつており、一九四六年創 フリカ・ブロック五七、中南米ブロック二二、西欧ブロック一五、共産圏ブロック一一、アメリカ・イギリス・ブロック八 ところが、昨年開かれた第一八総会現在の国際連合加盟国は一一三ヵ国で、その内訳は、「表一」の示すようにアジア・ア

立総会当時とは著しく変化している。

AAブロックであるといえよう。従つて、AAブロックの形成について述べることは、すなわちその内部のサブ・ブロック 益集団をもつものである。いいかえれば、多数の利益集団が、共通の目的を達成するために結集した一層大なる利益集団が たのであるが、このAAブロックという巨大なブロックはもとより純粋の単一体ではなくその内部にきわめて多くの異る利 (利益集団)の歴史を語ることである。 本節で筆者は、 このように、AAブロックは第一回総会における二二%から、第一八総会には終に全加盟国の五○%を越すまでに伸長し アジア・アフリカ地域における主要な利益集団形成の過程を概述し、

ブ諸国であつだ。そして、この五ヵ国 (エジプト、イラク、レバノン、サウジ・アラビア、シリア) は、いずれも一九四五年三月に成 さて、国連創立当初から加盟していたAAブロックのメンバーは前述のように一一ヵ国であるが、このうち五ヵ国はアラ そのAAブロックとの関係を検討してみたいと思う。

ループや一九四五年二月のメキシコにおけるチャプルテペック会議に始る中南米グループの協議グループとしての活動とと ループとしての歴史は、 立したアラブ連盟の加盟国であり、その連盟条約にもとづいて国連においても早くから協力体制をとつていた。(②) 一九三二年のウェストミンスター条令によつて制度化された英連邦会議の長い伝統をもつ英連邦グ その協議グ

ること、 めに組織した統一機構であつた。 通の言語 もに国連の多数の協議グループの中でもつとも古いものの一つであつた。 ラブ連盟は、 □加盟国相互の協力を確立し、その独立と主権を安全にするために各自の政策を整合すること、 共通の文化をもち、 いうまでもなく一九世紀中葉に起源をもつパン・アラビズムの歴史的産物であり、 そしてまた何よりも共通の歴史的運命を担うアラブ諸国が、 このことは、 アラブ連盟条約第二条が、 その目的として、 かれらに共通の利益の整合の 「⇔加盟国相互の関係を強化す それは共通の宗教、 (1)アラブ諸国に関

共

た

が、 約しており、 本連盟は、 する問題とその利益に関心を払うこと」を規定していることから明らかであるが、 当初から相互に緊密な協力体制をとりつつこれに臨んだのは当然といえよう。 安全と平和を保障し、 かくて、その予想した国際機構が国際連合という形で現われたとき、 経済的、 社会的関係を調整するため将来創設されるであろう国際機構と協力する」ことを 同条約はまたその第三条において、「…… アラブ連盟に忠誠を誓うアラ ブ Ŧi. カ

このように、

国連におけるアラブ協議グループは、

アラブ連盟と非常に緊密な関係にあり、

アラブ諸国

一の同連盟に

対する

国

ト が、 は アラブ連合に合邦)、 繁に行われる同グループの会合の司会も連盟の代表者が行つているといわれる。また、 忠誠の度合が、 自動的にアラブ協議グ 次々にこの協議グル 直ちに国連におけるアラブ協議グループの協力の度合に反映した。 = ルダン、 ル プ 五六年にモロッコ、 ープに参加を認められており、 K 加わつた結果、 今や一三ヵ国を数えるに至つている。 スーダン、 チュニジア、 九四七年にイェーメン、 六二年アルジェリア、 一九四五年サンフランシスコ会議以来頻 このような構成国 国連に加盟したアラブ連盟の構成員 五五年にシリア(五八年から六一年まで そして六三年にはクェー の増大とともに

1

ブ諸国結集の要因が現存する限り、少くとも対外的には、 このグループ内にも様々の分裂の要因が生じており、イスラエル戦争における敗北以来外観ほどその結集力は高くないとい このグループの会合の決定は何ら拘束力をもつものではないとはいうもののパレスチナ問題という強力なアラ アラブ協議グループの協力が今後もつづけられるであろう。

成功しょことが、今日のアジア・アフリカ協議グループを誕生せしめる端緒を開いたのである。 題について意見の調整をはかるためのAA諸国参加の最初の会合が開かれたが、これら諸国の協力によりこの問題の解決に 四総会における旧イタリア植民地の措置をめぐつてであつたといわれる。この時インド代表ベネガル・ラウの招集で、 決して行われなかつた。 このような国連初期におけるアラブ諸国の協力はアラブの利益のみを目的とし、全アジア・アフリカ的規模では 今日いうアジア・アフリカ・ブロック的な協力が国連において行われた最初の例は、 一九四九年第 同問

シ ア**、** 決のため積極的に協力した。この経験は、第六総会以後も引継がれ、アド・ホックなものではあつたが、 従来消極的であつたAA諸国が、次第に結束して積極的な態度をとるようになつた契機は、 イランといつた中立主義諸国が加わつて一二ヵ国から成るアジア・アラブ・グループが、国連において朝鮮戦争の解 活動が始まつた。 西イリアン合併等の諸問題に見られる新しい植民地問題が国連で討議され始めると、これらの問題を媒介としてAA イラク、 レバノン、サウジ・アラビア、 この重大な平和に対する脅威に直面して、 特に、 一九五一年の第六総会以後、 シリア、イェーメン)に、インド、 従来も協議グループとして活動を行つていたアラブ連盟諸国 モロツコ、 チュニジア、 ビルマ、 アフガニスタン、 アルジェリア等の独立問題や、 一九五〇年六月の朝鮮戦争の パキスタン、 A A ブロッ インドネ ク独自 ェ ズ

九五三年七月朝鮮休戦協定が成立し、 極東の緊張が和いだのを契機として、 アジア地域には著しく連帯感が高まつた。

諸国の団結も次第に強化されていつた。

朝鮮戦争においてアジア中立主義諸国が大きな役割を果したことは、かれらに強い自信を植えつけたが、それはまた東西両

アジア・アフリカ・ブロックと国際連合

高 一 六 二 六 --

議

陣営の鋭く対立する冷戦下にあつて戦争への破局を救うために、また依然として植民地主義の重圧にあえいでいるアジア・ このようなアジア・アフリカ諸地域における連帯意識を背景に、一九五五年四月この地域の殆んど全独立国二九 フリカを解放するために、 これら地域の国民が協力して立上らねばならない、 という共通の民族意識となつて現われた。 ヵ国を一

アジア・アフリカ地域諸国の会議開催を提唱し、 れたコロンボ会議(コテラワラ・セイロン首相の提唱した東南アジア首相会議)の席上、 堂に集めて開かれたのが、バンドンにおけるアジア・アフリカ会議である。バンドン会議の発端は、 他の参加国(インド、パキスタン、セイロン、 サストロアミジョヨ・インドネシア首相が、 ビルマ) 首相がこれに賛同したこ その前年四月末開催さ

とに始まり、 前記五ヵ国が共同主催国となり、二五ヵ国が招請を受けた。被招請国は、 そのごインドネシアのボゴールにおける準備会議 (一九五四年十二月) を経て、 アフガニスタン、 バンドン本会議の開催となつた。 カンボディア、 中央

アフリカ連邦 リベリア、 リビア、 中共、 ェ ネパール、 ジプト、 エチオピア、 フィリピン、 ゴ サウジ・アラビア、 ールド・コースト、 スーダン、 イラン、 イラク、 シリア、タイ、 日本、 ∄ トルコ、 ルダン、 北ヴェトナム、 ラオス、 南

ヴェ がすべて中共政府を中国の正統政府と看做したために、イスラエルについては、 域に属する独立国で招請されなかつたのは、 南アについては、 トナム、イェーメンの二五ヵ国であつたが、このうち中央アフリカ連邦を除く二四ヵ国の代表が会議に参加した。 会議は、 一九五一年以来国連で討議されていたそのアパルトヘイト政策に対する非難のゆえに、 ↑アジア・アフリカ諸国間の親善協力を促進し、 中国(国府)、 イスラエル、南アの三ヵ国であつたが、 善隣友好関係の樹立を計り、 アラブ諸国の激しい反対を予想して、 中国については、 相互共通の利益の探求 いずれも招請 主催国 A A 地 また を受

る地位並びに彼らが世界平和と協力のためになし得る寄与について検討する、ことを目的として四月十八日から一週間にわ リズム、 人種主義および植民地主義に関する諸問題を検討する、 口参加各国の社会的、 経済的、 文化的関係の検討を行う、 四アジア・アフリカ諸国および諸国民の今日の世界におけ ロアジア・アフリカ諸国民に特別関係あるナショナ

たつて開かれ、 同二十四日、 最終コミュニケおよび平和十原則を宣言して閉会した。

AA諸国の団結を最も鮮明に世界に誇示したものであつた。それは新興後進諸国を一堂に会せしめ、

経

議参加国による協議グループ れを契機にして国連におけるAA諸国も、 でなく、 文化面における協力、 AA諸国の将来の協力の基礎を確立し、その一層の団結を促す契機ともなつた点で高く評価さるべきであつた。 人権と自治、 (いわゆるバンドン・グループ) 植民地独立、 同年秋の第一〇総会以後、 世界平和等の問題について意見を交換し、 を組織し、 中国、イスラエル、南ア三ヵ国を除外したバンドン会 従来のアド・ホックなものから一歩進んで、定期的会 相互の理解を深めたばかり

合をもつようになつた

期的会合への発展)をもたらしたが、 フリカ諸国の相次ぐ国連加盟は、 口 るセイロン等六ヵ国の加盟および一九五六年第一一総会における日本等五ヵ国の加盟でありこの結果、 ッ ンドン会議はこのように国連におけるAAブロックの質的転換(協議グループのメンバーの確定およびアド・ホックな会合から定 クの勢力は二八ヵ国となり、 第一四総会の九ヵ国から第一八総会の三四ヵ国へと急激な増加をもたらし、 全加盟国の三分の一を越した。次いで、一九六〇年第一五総会(アワリカ総会) 他方このAA協議グループに量的発展をもたらしたのは、 一九五五年第一〇総会におけ 国連におけるAAブ このため第一 に始まるア

八総会ではAAブロックは遂に総会の過半数を制するに至つたのである。 量的発展によつて、一九五五年以後AAブロックは巨大な勢力に成長し、

国連において非常に大きい勢

このような質的、

に対する各国のイデオロギー 定しがたい。そのような観点からAAブロックを眺めてみる時、このブロックに内在する最大の分裂の要素は、 していつたこと、すなわち益々多面化し且つ増大する分裂の要因を孕みつつAAブロックの膨脹が行われていつた事実も否 力をもつようになつたのであるが、しかし、一方ではこのようなブロックの拡張それ自身が、 的乃至は外交政策上の相違に求められる。南北問題については、 その内部に分裂の要因を育成 AAブロックに属する国は 東西両体制

(七九三)

四九

本を唯一の例外としてすべて後進国であり、そこには利害関係の一致こそあれ、分裂の要素は見当らなかつた。

けではないが、 機構(現在の中央条約機構)であり、 道であるというにあり、 ているグループは反主流派であり、その中間に後述するブラザビル派を中心とする穏健なアフリカ諸国がいる。 けるこの種の軍事同盟の中心は、 ループの東西問題に対する基本的理念は、バンドン会議でも、パキスタンのアリ首相やトルコのゾール副首相が説明してい わゆる積極的中立主義(非同盟主義)をとる国をAAブロックの主流派とすれば、 ィリピン、それに日本を加えた六、七ヵ国は、 東西問題に対する国連におけるAA諸国のイデオロギー乃至は外交政策上の相違は、 共産主義を「新しい型の植民地主義」と考え、その防止のために全力をつくすのが国際の平和を維持する最善の 事実上一グループを形成してきたとみてよい。 このような見地からこれら諸国は西側の指導国アメリカと軍事同盟を結んできた。アジア地域にお この両条約機構に加盟するトルコ、イラン、イラク (五八年脱退)、パキス タ 一九五四年九月締結された東南アジア条約機構と翌五五年一一月成立したバグダッド条約 国連においても同一歩調をとることが多く、特に協議のための会合をもつわ 反共軍事同盟に加盟して西側にコミットし 大別して三つの立場に分けうる。 軍事同盟グ

相手方を刺戟し、 義の絶滅」を基本的テーマとして一大会合を開いたのが、 交にその典型をみるこの中立主義が支配的風潮となつているが、このような中立主義国が「世界平和の確立」と 国の安全と国際の平和を維持しようと考えるのがいわゆる中立主義グループである。 の自主性を失うおそれのあること」を想定し、 このように、 同盟によつて自国の安全と国際の平和を維持しようと考える軍事同盟グループに対して、「同盟機構がその かえつて世界の緊張を激化すること、また同盟により、新興国は大国の内政的外交的制肘をうけ、 積極的中立主義或は非同盟主義とよばれる外交政策をとることによつて、 一九六一年九月のベオグラード非同盟会議であつた。 第二次大戦後のアジアでは、 「植民地主 ネール外 自

アフガニスタン、アルジェリア、ビルマ、

カンボジア、セイロン、

コンゴー (レオポルドビル)、サイプラス、

エチ

結合されたものであつたのに対して、 た。バンドン会議が、 オピア、 マリア、スーダン、 ガーナ、 ギニア、インド、 チュニジア、 主義の異る軍事同盟派諸国も中立主義派諸国も加え、 アラブ連合、 インドネシア、 ベオグラード会議は、 イェーメン、 イラク、 東西問題に対し中立主義という基本的姿勢を明白にした国家グ キューバ、 レバノン、 ユ マ I ただアジア・アフリカという地理的紐帯により ゴースラヴィアの二五ヵ国が参加し モ p ٦, ネパ ı j, サウジ・アラビア、 て 開 か ħ ソ

IJ,

ッ

きりと拒否した。 しかし、 植民地問題、 世界平和の問題での団結を約し、 また国連についても、

ループのみを結集したという点において歴史的意義をもつものであつた。

ベオグラード会議は、

第三ブ

p

ッ

クの形成をはつ

中立主義諸国の、 すべての軍縮交渉への参加

査察と管理の効果的組織による全般的・完全軍縮の保証と、そのチー ムへの中立主義諸国メンバー の参加

経済社会理事会の拡大、

国連事務局構成の公平な地域的配分

国連憲章の改正による安全保障理事会、

ら強い結集力をみせたアラブ協議グループについて、 さて以上のように筆者は、 と具体的要求を決議したことは、 AAブロックの形成という主題のもとに、 このグループの国連における団結と積極的活躍を予測せしめるものであつた。 第二には、 朝鮮戦争を契機として大きく成長し、バンドン会議に開 第一には、 アラブ連盟を中核として国連創立当初

した東南アジア諸国を中心とするAA協議グループについて略述してきたが、最後に、 もつとも遅くスタート L しか

「アフリカン・ 最近その動きを非常に注目されているアフリカ諸国のブロック化現象について簡単に触れておく。 ーソナリティ」 の概念が、 国際政治の分野に初めて登場したのは、 前記バンドン会議においてであ

間には、 漸く全アフリカ的人格の意識が芽生え始めた。 エチオピア、 リベリア、 しかし、この時期におけるアフリカ諸国が勝れてアジア・アフリ ールド・コースト スーダン (未独立)の六ヵ国

リビア、

ゴ

(未独立)、

の会議に参加したエジプト、

アジァ・アフリカ・ブロックと国際連合

五 (七九五)

カ

五七年十二月カイロで開催されたアジア・アフリカ諸国民会議が矢張りアジア・アフリカ的基盤で行われたことにもうかが 的連帯意識の上に立つて行動していたことは、 一九五五年四月ニューデリーで開かれたアジア諸国会議の系譜をひき、 一九

向に革命的変化をもたらした。 九五八年四月、 エンクルマが主催しガーナのアクラで開かれたアフリカ独立諸国会議は、 南ア連邦を除く当時のアフリカの全独立国八ヵ国(エチォピア、 ガーナ、リベリア、リビア、 このようなアフリカ諸国の動 モロッ

スーダン、 チュニジア、アラブ連合)を集めたこの会議の目的は、 国際問題に対するアフリカの団結を促すことにあつたが、

その国家的多様性にもかかわらず、 反植民地主義、 反人種的不平等, 経済的後進性の克服等多くの共通の課題をかかえたこ

その基本的外交政策

アフリカの植民地問題、

人種的不平等問題などで政策の統一に成功した。

におけるアフリカ協議グループ結成の道を開いた。 アクラ会議は、 アフリカの声と「アフリカン・パ ーソナリティ」 アクラ会議は、 その第一一決議において、 の国際社会への登場を意味するばかりでなく、 次のように規定している。 国際連合

アフリカ独立諸国会議は、 国連加盟国政府は、 非公式常設機構として、 協議と協力の機構が重要であることを確信して、 それぞれの常設代表部を、 次の目的で設ける。

(b) 本会議および将来行われる諸会議の決定を実行するため、 具体的、 実際的措置に関する勧告を検討し、 作成する

(a)

アフリカ諸国に共通するすべての問題を整合する。

- (c) 将来のアフリカ独立諸国会議のための準備的取極を行う。

規定に基づいて、 同年五月非公式常設機構 (整合機関と事務局から成る)がニューヨークに設けられた。 および加盟国に共通 整合機関は、 各

の関心事に対する協力のための機関であり、その決定は加盟国の行動を拘束するものではなかつたが、多数派のもつ道義的 国の常設代表部から成り、 少くとも月一回会合し、 議長は月番制とした。 同機関は、 協議、 情報交換、

は 説得力は強く、 このグループ内にも多くの分派を生ぜしめることとなり、その結集率も低下しているが、非公式常設機構の機能と活動(タイ) 国連総会の開会中は特に重要な役割を果してきた。第一五総会以後のアフリカ協議グループの急 激 ts 脹

は今日も続けられており、 国連において特異の存在となつている。

の目的とするところは を含めてこの二年間に多数の会議がアフリカで開かれたが、それが政府レベルのものであれ非政府レベ アクラ会議の精神は、 「アフリカン・パーソナリティ」の確立であり、 一九六〇年六月のアジス・アベバにおける第二回アフリカ独立諸国会議に受継がれた。 (22) 対外的団結の強化であつた。 ルのものであれ、 この両会議

ることとなつた。 チャド、中ア、コンゴー、 本的問題に対して、 ありフランスと経済的紐帯をもつ国であつたことは、 ゴを合わせ、 しかるに、 この大量加盟は 一九六〇年六月末から十月にかけて、 一六ヵ国が国連に加盟した。このためアフリカ協議グループは、 それは、 アフリカ内部に異る立場をとるグループが生じたことを意味したからである。 ダホメ、ガボン、象牙海岸、マダガスカル、 国連におけるアフリカの地位に重大な変化を生むとともに、この一六ヵ国中実に一三ヵ国(カメルーン、 現実の国際政治との関係において「アフリカン・パーソナリティ」 一四のアフリカ諸国が独立し、同年初頭に独立していたカメル 従来のアクラ=アジス・アベバ的アフリカの統一に重大な影響を与え マリ、ニジェール、セネガル、 従来の九ヵ国から一挙に二五ヵ国となつた トーゴ、上ヴォルタ)が、 をいかに把握するかという基 フランス系で

中でも、 カ統 の分裂を象徴するものとして、また、 このような情勢を背景として、 機構会議は、 一九六〇年十二月のブラザビル会議と翌六一年一月のカサブランカ会議の二つは、「アフリカン・パーソナリティ」 再び 「アフリカン・パ 一九六○年秋から六三年にかけて各派による多数の会議がアフリカで開かれた。 六一年五月と六二年一月に開かれたモンロビア、 ーソナリティ」 の統一をもたらそうとする努力として、 ラゴス両会議と六三年五月のアフリ 注目に値するものであつ これらの

た

(モナノ

らの諸国は、 憲章」を採択したが、その第五条は、「国連内にアフリカ・マダガスカル連合のグループを結成し、 このグループは、 の重要な決議の前に必ず協議する」ことを規定した。この結果、一九六〇年九月以来アド・ホックな会合を行つてきたこれ のブラザビル会議派一二ヵ国は、 ゴーのブラザビルに集り、 今後国際政治に共通の態度をもつて臨むことを決定したが、更に同年十二月、マダカスカルを加えた一二ヵ国が、 九六〇年十月、 一九六一年九月からはブラザビル・グループという正式の名称の下に定期的会合を開き、 独立したばかりの旧フランス系アフリカ諸国一一ヵ国による最初の会議が象牙海岸のアビジャンで開か 国際問題に対して共通の態度を押進めるために共同の外交的努力を払うべきこと等を約した。 翌六一年九月のマダガスカルのタナナリブにおける会議で「アフリカ・マダガスカル連合 政策の調整を行うこ 一切 コン

まつたが、その主要関心事はアフリカ統一とブラザビル派との関係調整にあつた。 危機であつた。このような情勢の変化に対処するため、 ブラザビル派の挑戦とコンゴー事件を契機としたアフリカ統一の危機は、 同年五月から、 アルジェリア(未独立)、 リビア、 セイロンを除く六ヵ国の参加の下に、その最高機関である「アフリカ政治委員会」の活動が始 セイロンの八ヵ国が、 一九六一年一月、 モロッコのカサブランカに集つた。会議はカサブランカ憲章を採択 モロッコ、アラブ連合、 従来のアフリカ協議グループにとつても重大な 国連におけるカサブランカ協議グループ ギニア、 マリ、

アジス・アベバに始つたアフリカ統一の動きは、 第一五総会には早くも行詰つたが、このような局面を打開し両派の意見を調整するため、一 ブラザビル派、 カサブランカ派の分裂とコンゴー問題をめぐる 九六一年リベリ

の活動は非公式ではあるが、

会合はしばしば行われており、

その団結は次節に明かなように可成り固い

アの首都モンロビアで全アフリカ会議が開かれた。 ところがアルジェリア(未独立)の参加が認められなかつたカサブランカ

派がこれをボイコットしたため、会議は同派を除くブラザビル派と中立派(エチオピア、リベリア、リビア、ナイジェリア、シェラ

ことは、アフリカ内部における南北問題を暗示するものとして興味深い。 統一への反対、連帯感に基づく協力、と三項目までが、カサブランカ派の唱えるアフリカの政治的統一に抵抗を示している として挙げた六項目のうち、 レオネ、 ソマリア、 チュニジア、 ü内政不干涉、 **←− ゴ)の二○ヵ国が参加して行われた。この会議が、アフリカ諸国間関係を規定すべき原則** (**v** いかなる全アフリカ的指導性をも拒否、 vi 政治的統合に基づくアフリカ

すべきである。 起されるすべての問題に対処するため、 ラゴス会議には、サハラ以北のアラブ・アフリカ諸国がすべて欠席し、 加国のうちチュニジア、 フリカ会議が開かれたが、アルジェリアの参加を認められなかつたカサブランカ派は今回もボイコットした。 モンロビア会議の諸原則を確認し、首脳会議、大臣会議、 とつては、アラブ・ナショナリズムが、アフリカの統一に優先しているのだ」との非難が参加国の間に高まつた。同会議は、 モンロビア会議にカサブランカ派を参加せしめることに失敗したため、翌六二年一月、ナイジェリアのラゴスで再び全ア リビアが欠席、 新たにコンゴー (レオポルドビル) とタンガニカが加わつて、 二〇ヵ国で開かれた。 国連加盟のアフリカ諸国により一ブロックを形成する」ことが決定されたのは注目 事務局の三機関の設置等を定めたが、 事実上黒人アフリカ会議となつたため、 特に、「将来国際連合に提 会議は先の参 「かれらに

はなお未知数である。 機構憲章が採択された。 アジス・アベバにおけるアフリカ統一機構会議には、 モンロビヤ、 アルジェリアが第一七総会には国連に加盟して、 特に国連におけるアフカリ諸国の団結と影響力という点で、いかなる意味をもつかは第一八総会を経たのみの今日で ラゴス両会議は、カサブランカ派のボイコットによつて全アフリカの統一をもたらすことに失敗した。 同憲章によりアフリカの内部的統一は強化されたかに見えるが、 モロッコを除く全アフリカの独立国三一ヵ国が参加し、 統一会議を阻む主たる障害は取除かれたため、一九六三年五月下旬の それが外部世界に対する反応にお アフリカ統一 しか

- AAの主導権はアラブ諸国が握つていたし、AAといつた場合にもそれはアシア・アラブを意味した。 AAブロック内の他の国が余り目立つた活動をしなかつたのに比して、アラブ諸国は可成り活発に動いたので、最初のいくつか の 総 会 で
- Ghali. "The Arab League 1945-1955," International Conciliation, May 1955, pp. 386-448; G. Kirk, The Middle East in the War. Lon-Khadduri, "The Arab League as a Regional Arrangement," American Journal of International Law, 40 (Oct. 1946), 756-777; B. Y. Boutros-Hurewitz, J. C.; Diplomacy in the Near and Middle East. New York. 1956, Vol. II, pp. 245-249. なおアラブ連盟については、
- (△) See Houston, John A.; Latin America in the United Nations, New York, 1956

don, 1952, pp. 333-344

- See Hovet, Bloc Politics in the U. N., p. 79.
- <u>16</u> 朝鮮戦争中のアジア・アラブ・グループの積極的協力と活躍は、一九五〇年十二月五日の「国連アジア・アラブ十一ヵ国、三八度線での停 中国、エチオピア、リベリア、トルコ、フィリピン、タイの六ヵ国は、このグループに参加しなかつた。
- 「国連アジア・アラブ十二ヵ国朝鮮不派兵決定」等の記録に残つている。 戦を中国、北鮮に要請」、 一九五一年四月五日の 「国連アジア・アラブ十三ヶ国、 朝鮮問題解決に小委員会を設置」、 一九五三年二月一七日の
- 詳しくは、See Kahin, George McTurnam; The Asian-African Conference: Bandung, Indonesia, April 1955, N. Y.,
- るのであります。」(蠟山芳郎、阪本徳松編著「十七億のめざめ」一九一頁から引用)と述べているが、これはまた参加した大多数の国の考えで と信じます。このことはつまり、アジア・アフリカが世界組織の行動と運命において、増大せる役割を演じなくてはならないことを意味してい 過半数が世界的問題に政治的に参与しはじめたことを宣言したのであります。 われらの大組織体である国際連合は、パンドンから力を得た アフリカすなわち、独立を完成し、世界における自らの役割を感じとつている新らしい民族の出現を意味するからです。パンドンは世界人口の ネール首相はこの会議において、「バンドン会議は歴史的な事件であります。会合そのものが偉大な事実なのであります。新らしいアジア・
- (9) ベオグラード会議については、See Government of Yugoslavia: The Conference of Heads of State or Government of Non-Aligned Countries Belgrade, Sept. 1-6, 1961, Beograd, 1961.
- (2))「アフリカン・パーソナリティ」については、たとえば《Legum, Colin; Pan-Africanism, London, 1962, pp. 20-22, pp. 117-118》を参照
- See Hovet, Africa in the U. N., p. 110. Figure 6.

一三ヵ国が参加した(アクラ会議の八ヵ国と、アルジェリア、カメルーン、ギニア、ナイジェリア、ソマリア)。

諸国の投票行動を分析してみることによつてそれを明かにしようとするものである。 はこの各ブロックは、国連総会における投票でどの程度の、また、どのような事件で、団結を行つているであろうか。それ はとりも直さず投票の実質的背景をなす各協議グループの団結の程度を研究することであるが、本節は、国連におけるAA 前節において筆者は、 AAブロックとその内部の各サブ・ブロックの形成過程についての簡単な描写を試みたが、それで

ザビル派、軍事同盟派等が、この点で根本的に異る政策をとつて対立することが、 八%であるが、これらはいずれも主として東西両体制間の諸問題に関するもので、 がある。すなわち、特にその不一致が著しいのは、「麦五」の示すように、「紛争の平和的解決」の五五%、 ック中最低であるが、これはAAブロックという大家族が政治的立場の異る多数の国家を包含していることに主たる原因 さて、「表三」は、 国連総会における各ブロックの団結率を示したものである。 AAブロックの平均団結率六九%は五ブ(3) AAブロックの団結率を著しく低下せし 先に述べたようにベオグラード派 「その他」 の 五

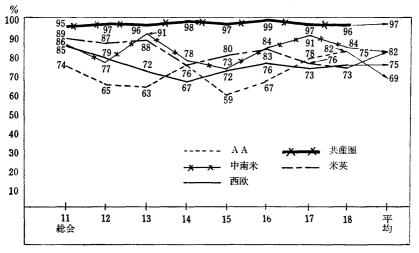
めている。

ら南北問題に移行したことに求められるべきである。パリ首脳会談の流会、 の上昇の原因は、 しており、第一七、一八総会では、 会にみられない複雑な様相を呈し、国連の歴史においてもつとも紛糾した総会の一つとなつた一九六〇年の第一五総会を頂 しかしながら、AAブロックの年度別の団結率の推移を「表三」で見ると、第一五総会頃を最低として最近は次第に上昇 それ以後の国連総会は比較的「静かなる総会」に終始している。このことは、東西両ブロック間 ブロック内における団結意識の向上に求めるよりはむしろ、国連総会における論議の中心が、 米英ブロック、西欧ブロックを抜いて第三位にある。このようなAAブロックの団結率 AA諸国の急増等の事情を反映して、従来の総 の激しい対立が

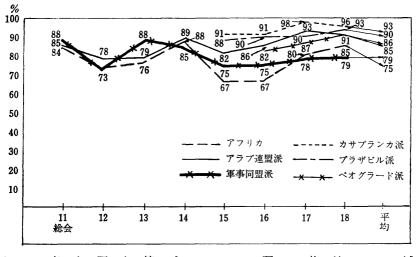
五七

アジア・アフリカ・ブロックと国際連合

表三 各ブロックの総会における団結率



表四 AAブロック内各派の総会における団結率



減少し、 率はそれぞれ四 会では、東西問 第一一—一五総 題に移行したこ のような南北問 あつたが、第一 八%、三八%で 全体に対する比 題、南北問題の プルをみても、 め選択したサン で、本研究のた とを示すもの 権・人種関係」 地問題」や「人 の中心が「植民 かけられる議題 総会に

五八

(八〇二)

	表五 AAフロック内各派の事件別団結率												
事件ブロック	紛争の平和 的解決	植民地問題	核兵器・ 軍縮問題	人権・人 種問題	その他	(平 均)							
A A	% 55	77	81	75	58	(69)							
アフリカ	61	80	8 8	74	69	(75)							
アラブ連盟派	78	93	86	98	70	(85)							
軍事同盟派	91	70	7 5	79	86	(79)							
ベオグラード派 (第 16 総会~)	79	87	92	82	85	(86)							
カサブランカ派 (第 15 総会~)	90	95	90	94	95	(93)							
ブラザビル派 (第15総会~)	85	91	95	86	91	(90)							

政策上の接近を示すものではなく、既に述べたように国連総会における論議の中 モンロビア派の多数派率が次第に増加していつた。第一七総会以後アフリカ・グ づいたグループであるが、このグループの団結率で注目すべきは、ブラザビル派 の上昇を生んでいる最大の原因といえるであろう。 心が南北問題に移行したことと密接な関係をもつものといえる。 ループの団結率は再び高まつているが、これはカサブランカ派とブラザビル派の たが、第一五総会以後は逆にカサブランカ派が少数派となり、ブラザビル派或は -ダン、ガーナ、ギニア)であつて、 エチオピア、 リベリア等は少数派に 属してい ヵ国の主導権を握つていたのは後のカサブランカ派諸国(アラブ連合、モロッコ、ス 生じたことを意味する。第一三、第一四総会においては、アフリカ・グループ九 にブラザビル派の加盟によつてアフリカ・グループの内部に重大な分裂の要因が 諸国の大量加盟した第一五総会にその団結率が急減していることで、これは明か る。このうちアフリカ・グループは、AAブロックと同じように地理的紐帯に基 さて、「麦四」 はAAブロック内各グループの年度別団結率を示したもの で あ

ら考えると、この国連総会における討議の重点の変化が、

AAブロックの団結率

六一一八総会では、二九%、五三%と全く一変している。本来AAブロックが、

東西問題にみられる分裂傾向に比して南北問題では固い団結を示してきたことか

五九 (八〇三)

AAブロックは、「表五」のAAブロックの事件別団結率の示すように、

ている。このように、 南北問題や核兵器・軍縮関係の諸問題では八○%前後と比較的高い結集を見せるが、東西問題では五○%代で完全に分裂し ス現象も、各サブ・ブロック単位で把握しなければ理解しえない。この傾向は、程度の差こそあれ、アフリカ・グループに 東西問題ではAAブロックは完全に解体してしまうので、その国連におけるブロック・ポリティック

が、その中立主義は周知のごとく明かに西側に片寄つた消極的なものであり、急進的中立主義外交を主張するカサブランカ もみられる。 ブラザビル派は、「世界の相対立する二つのブロックに同調しない政策を支持する」方針を打出して はい る

派との間には、

東西問題に対する政策で重大な懸隔があるからである。

主義諸国と東南アジア系中立主義諸国の合流したベオグラード非同盟会議派、アメリカとの軍事同盟派およびその中間にあ このように東西問題を中心に考える場合、AAブロック内の各サブ・ブロックは、アラブ連盟、 カサブランカ派系の中立

び「麦五」で比較して見ると、カサブランカ派とブラザビル派が九〇%代で非常に固い団結率を誇つていることが判る。 ブ・ブロック中でもつとも団結率の低いのは軍事同盟派であるが、これは同派が南北問題や核兵器・軍縮関係の問題では、 つて穏健な中立主義を唱えるブラザビル派の三グループに大別しうるが、これら各グループの事件別団結率を「表四」およ

裂するためである。また、アラブ連盟派は、ジョルダン、レバノン等の不一致票のため東西問題における団結率は従来余り 西側に比較的近いトルコ、 日本とAAブロックの一般的投票態度に同調するパキスタン、イラン等のグループにしばしば分

団結率は、各投票におけるそのブロック内多数派のブロック全体に対する割合である。例えば一○ヵ国から成るブロックが、或議案に対し 高くなかつた。

アフリカ内部における勢力の推移については、See Hovet, Africa in the U. N., p. 126, Figure 13 and p. 132, Figure 14

AAブロックの国連における地位

几

ける投票結果を自国もしくは自グループの政策に有利にすることにある。 開いて意見の交換を行い、 おける覇権に挑戦することを主たる目的としたものであつた。 人種差別政策の維持を助成していることに強い不満をもつたAAブロックが、その勢力を結集することにより西側の国連に おける協議グループ形成の目的もまたこの例外をなすものではなく、 序論においてすでに明かにしたように、 見解の整合に努めはじめた主たる目的は、 国連にブロック乃至はグループが組織され、 西側諸ブロックの国連支配が、 ブロック・ヴォーティングの利用によつて、 AAブロックおよびAAブロック内諸派の国連に それが不定期に或は定期的に会合を 植民地主義を温存し、 国連にお

教派率に大きな影響を及ぼしている。 たAAブロックの東西問題と南北問題における団結率にみられる著しい対照 さ如何が、総会におけるAAブロックの影響力と密接な関係をもつことを物語つている。 でそれぞれ七六%、 の総会に占める多数派率もそれぞれ五三%、 このような目的から国連総会において結集したAAブロックの団結率は、 九四%の多数派率を占めているのと著しい相違が生じている。このことは、 即ち、 三八%に過ぎず、 団結率の低い、「紛争の平和的解決」と「その他」の問題では、 団結率の高い、 前節で述べた通りであるが、その際明かにされ (表五参照)は、 「植民地問題」や AAブロックの総会における多 AAブロック内の団結の固 「人権・人種関係」 AAブロック の問題

も次の点に注目したい 「表七」 国連総会における各ブロックの年度別多数派率である。 この表は多くの興味ある事実を示しているが、 中で

- 西側ブロ ッ 1 特に米英ブロックの多数派率が第一三総会を頂点として減少しつづけている。
- これと対照的に、 共産圏ブロックの多数派率は上昇しており、第一八総会では遂に米英ブロックを大きく抜いて六五

アジア・アフリカ・ブロックと国際連合

重大な脅威とはなつたが、 おける西側へゲモニーに対する AAブロックの膨脹は、 年の第一〇、一一総会における 諸国の著しい増加にある。 うまでもなく国連におけるAA 変化を生んだ最大の原因は、 この多数派率における重大な の示すように一九五五、六 国連に 決議

麦

案の内容を 出来る だ け穏和 に

%にも達した。

そのご著しい上昇を示し、 も第一三総会を最低として AAブロックの多数派率

AAブロックの総会における事件別多数派率 表六

を占めている。

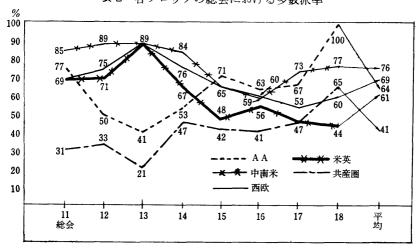
ク中もつとも高い多数派率

ックをも抜いて各ブロッ

第一五総会以後は中南米ブ

			総	会									
事	件	_		<u></u>	11	12	13	14	15	16	17	18	平均
平	和	的	解	決	100	67	50	0	63	20	33	100	(53)
植		民		地	67	60	75	75	60	60	100	100	(76)
核	兵	器 •	軍	縮	_	43	0	100	100	100	67	100	(67)
人	種	•	人	権	100	100	100	100	100	100	50	100	(94)
そ		Ø		他	50	25	20	0	71	33	0	100	(38)
		at			(77)	(50)	(41)	(53)	(71)	(63)	(67)	(100)	(64)

各ブロックの総会における多数派率



しているが、 激な増加は、 の覇権は第 Ļ AA諸国の結束を崩すことによつて、西側が総会の三分の二の多数をうることはまだ可能であつた。 そのうち二七ヵ国はAAブロックに所属しており、 このような西側の国連における優越を根底から崩すものとなつた。 四総会まではまだ維持されていたといえる。ところが、一九六〇年の第一五総会以後再び始つたAA諸国 ーゴとソ連ブロックのモンゴリアであつた。 残りの三ヵ国も中南米ブロック所属で比較的急進的のジャ 従つて、 第一五総会以後の新加盟国は三〇ヵ国に達 その大部分は穏健なもしくは急進的な中 その意味では西側 0 急

マイカ、

۲

リニダッド・トバ

米 立主義を採用し、 南北問題が第一六総会以後著しく増えていることにあるが、この点については前述した通りである 付けている。 ソ両国との同調度の平均をとつてみても、それぞれ四七%、六○%であり、 AAブロックや共産圏ブロックの多数派率を増大せしめた第二の原因は、 特に、 増大して来た南北問題では反西欧的態度に 終始 した。 多数派率における変化の必然性を明白に裏 前記新加盟二九ヵ国(ザンジバルは未投票) AAブロックの団結率の比較的高

派を代表して中央アフリ 内各派とこの一般的傾向との関係はどうであろうか。「表八」は、 ンド、アラブ連合はまたベオグラード派も代表する)と五つの国を選んで、その総会における多数派率を調べたものである。 カ、 カサブランカ派を代表する国としてアラブ連合、 軍事同盟派を代表する国として日本とタイ、 東南アジア中立主義国を代表してインド ブラザビル 日本を

このようにAAブロックは全体として総会の多数派となる率が非常に大きくなつてきているが、

では

A A ブロッ

ク

の

例外として他の国はいずれも第一五、一六総会頃を底に、

以後の総会では急激に多数派率を上昇させている。

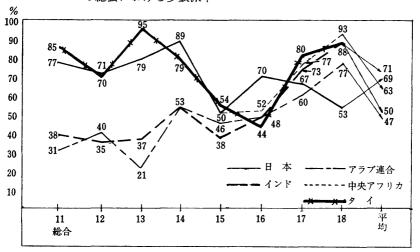
また「表九」

最近著しく向上している、 てよいが、 は 口 ック内では少数派に属することが多い、口ベオグラード派のインド、 右の五 最近ではアラブ連合の多数派率の方がインドのそれより高い、 ヵ国のAAブロック内での多数派率を示したものであるが、この表は、 ことを明かにしている。 なお、 第一八総会で同じ軍事同盟派に属する日本とタイとの間に著しい アラブ連合の投票態度をAAブロ ロブラザビル派のAAブロック内における地位 →日本、 タイという軍事同盟派 ックの主流派とみ は A

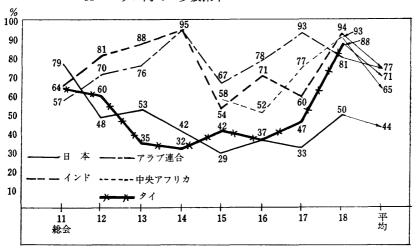
アジア・アフリカ・ブロックと国際連合

アジア・アフリカ・ブロックと国際連合

日本、タイ、インド、アラブ連合、中央アフリカ各国 表八 の総会における多数派率



日本, タイ, インド, アラブ連合, 中央アフリカのA 表九 Aブロック内での多数派率



のは、 相違がある 北側に立つ で踏切れず コはそこま 日本、トル のに対し、 を共にした 諸国と行動 て他のAA 南側に立つ 盟派は断然 タン等の同 ン、パキス 問題の多か つたこの総 南北

六四

(八〇八)

ことが多かつたためである。第一七総会におけるインドのAAブロック内における多数派率が減少し、アラブ連合との間に(%)

%台に急上昇した。このような同調率の変化は主として従来のアメリカに対する反対票が棄権にまわつたことによるのであ ドネシア等の中立主義積極派とともにアメリカとの間に三〇%台を示していたインドの投票同調率が、第一七総会には五〇 よるインド攻撃にまで発展し、 三〇%以上の差ができたのは中印関係の悪化と重大な関係がある。数年来紛糾していた中印国境問題は、 この西側への接近傾向の結果、 ためにインドの西側ブロックに対する態度は著しく融和的となつた。 インドのAAブロック内での多数派率は著しく減少した。 このためのインドのAAブ 従来アラブ連合、 同年秋の中共軍に イン

したもので、その相互間の投票上の親密度を表わすものとして興味深い。 表十」は、 国連総会という舞台におけるAAブロックに属する各国の、 日本、 アメリカおよびソ連との投票同調率を示(ダ)

率は再び高まつてい

ック主流派の指導国としての地位の喪失が喧伝されたが、第一八総会においては、

東西問題の減少もあつて、

その多数派

五一 低いのはパキスタンとイランで六四%である。同じメンバーの中でソ連との同調率のもつとも高いのは矢張りパキスタンで メリカとの軍事同盟派六ヵ国の中では、 もつとも低いトルコは僅か二七%に過ぎない。 トルコがもつともアメリカとの同調率が高く八九%、 パ キスタン、 イラン両国の米ソ両国との同調率の差が比較的小さい 日本は八一%、 もつとも

ブラザビル派一二ヵ国の米ソとの投票同調率はほぼ五〇%台で両者の間にはほとんど差がない。これは同派が東西問題で

の

は

南北問題におけるこれら両国の反欧米的傾向の大なためである。

は西側と、 南北問題では東側と投票態度を一にする一般的傾向による。

5 オグラード派二三ヵ国になると情勢は逆転する。 レバ ェ チオピア、 カ ンボジァのように比較的差の小さい国までその投票態度は一様ではないが、 ギニアやマリのように、米ソとの同調率の差が六○%近くもある国か いずれもソ連

アジア・アフリカ・ブロックと国際連合

六五 (八〇九)

ソ連との投票同調率 (11-18総会平均)

	国名		日 本 との同調率	アメリカとの同調率	ソ 連 との同調率
	× ●アルジェリ	7	52%	33%	84%
	●エ チ オ ピ	7	62	46	68
	ブルンデ	1	57	38	75
	〇カ メ ル ー	ν	67	57	45
	〇中 央 ァ ァ リ	カ	63	53	53
	O	F*	63	53	50
ア	○コンゴー (レオポルド	ニル)	67	51	56
	○コンゴー (ブ ラ ザ ビ	ル)	63	51	54
	○ダ ホ	×	61	52	51
	○ガ ボ	ン	64	57	46
	● ガ	ナ	52	36	78
フ	* ≠ =	7	43	28	85
	○象 牙 海	岸	65	53	51
	y ~ y	7	75	61	52
	〇マ ダ ガ ス カ	ル	66	56	46
	• ₹	y	40	27	84
	○モ - リ タ ニ	ア	67	53	62
ע	O= ½	ル	66	54	51
	ナイジェリ	ア	55	41	70
	ルアン	ダ	76	60	52
	○セ ネ ガ	ル	60	48	59
	シェラレオ	ネ	61	39	67
カ	●ソ マ リ	7	50	37	72
	タ ン ガ ニ	カ	54	33	81
	h —	ゴ	62	46	63
	ウ ガ ン	ダ	53	32	82
	●上ヴォル	g	65	52	52
	ザンジバ	ル			
	ケ ン	+	100	50	0
	AAブロック平均同	調率	63%	48%	62%

注 × アラブ連盟派 ○ ブラザビル派 ▲ カサブランカ派 ● ベオグ ラード非同盟会議派 ▲ アメリカとの軍事同盟派 六六

アジア・アフリカ・ブロックと国際連合

			3C 1 11	11品画の日本	, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,
アジア・		国 名	日本との同調率	ア メ リ カ との同調率	ソ 連 との同調率
7		●アフガニスタン	53%	37%	79%
フ IJ		●ビ ル マ	58	41	72
アフリカ・	東	●カ ン ボ ジ ア	60	47	68
ブロ		• t 1 p y	57	39	75
ッカ	南	_ ●イ ッ ド	57	40	76
ックと国際連合		●インドネシア	51	34	80
際連	ア	ラ オ ス	77	70	46
合		マレーシア	78	65	50
- 1	ジ	●ネ パ ー ル	58	41	71
		Δパ キ ス タ ソ	76	64	51
	ア	Δフ ィ リ ピ ン	83	76	39
		∆ <i>9</i> 1	88	76	38
		△日 本		81	34
		× 1	55	38	76
		×ジョルダン	69	54	60
į	中	× 2	68	43	79
		× × × × ×	70	55	61
	\ <u></u>	×サ ウ ジ ・ア ラ ビ ア	58	42	73
	近	×シ リ ア	54	34	79
		Δ1 <i>ラ</i> ν	78	64	48
	_	Δト ル コ	85	89	27
	東	× 1 ± 1 × 1	53	37	77
六七		● サ イ プ ラ ス	72	53	60
7.		× y	61	45	70
$\widehat{\pi}$	ア	× • ← □ ッ ⊐	50	32	80
(六二)	フ	× + + + + + × + × × × × × × × × × × × ×	55	38	75
$\overline{}$	ע	× × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → × → > > > > > > > > > > > > >	64	48	67
	カ	▼ア ラ ブ 連 合	50	33	81
	L	1.4	1	l	

の車件別投重同調率 カの日本

	表十一	谷ノロ	ュック	の日本	, / > !	, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,	理との€	升 1十 <i>加</i> 12	. 示问则"	"
,	ブロック		事	件	平和的 解 決	植民地 問題	核兵器 ・軍縮	人権・ 人 種	その他	(平均)
A タ A ブ	7			本	62%	60	81	65	54	(63)
ブ	七カア	×	IJ	カ	63	39	56	56	48	(50)
ロッ	国して			連	41	82	53	83	46	(62)
軍	〇 (日			本	95	75	78	76	88	(82)
同	さっ	×	IJ	カ	94	58	73	72	86	(75)
軍事同盟派ブラ	g ly			連	8	63	37	79	16	(40)
ブリラ	· (日			本	76	51	87	55	65	(64)
ラザ	二 カ フ	*	IJ	カ	76	43	56	38	55	(53)
ヒル	適し、			連	27	76	54	63	33	(52)
	ド (日 派量 (日			本	46	59	80	65	36	(56)
グラ	**三 {ァ	*	IJ	カ	46	32	48	59	30	(40)
ラー	翼しゃ			連	58	92	59	91	64	(74)

この派と類似しており、この派の声がアジア・アフリカの声となり、 参加しなかつた旧イギリス植民地からの独立国も、 との同調率の方がアメリカのそれより可成り高い。ベオグラード会議に その投票傾向はほぼ

の派がAAブロックの主流派であることは、AAブロック全体の米ソと

の平均同調率がそれぞれ四八%と六二%であることにも表われていると

いえよう。

これら諸国の日本、

アメリカ、

ソ連との投票同調率をブロッ

クを単位

ック内三派の性格を象徴的に示している。すなわち、軍事同盟派は、「紛 として事件別にまとめたのが「表十一」であるが、この表は、 A A ブロ

諸事件に対しては徹底的に西側に立つ(例えば、「紛争の平和的解決」におけ 争の平和的解決」や「その他」の問題に含まれる東西両体制間に起こる るアメリカとの同調率は九四%であるのに対して、ソ連とは僅か八%である)の に対 ことが判る。 この問題に関する限り軍事同盟派が必ずしもアメリカに追随していない 南北問題では米ソとの同調率の差は非常に僅少であり、少くとも

は がないが、 軍事同盟派ほど大ではないとはいえ明かに西側に好意的であり、 事件別にみると可成りの特徴が表われて い る 東西問題で そ

ブラザビル派は、その平均同調率においては米ソとの間にほとんど差

六八

の唱える中立主義が「西寄りの中立主義」であることをその数字は物語つている。しかし、他方南北問題になると情勢は逆

ソ連との同調率の方が遙かに高く、 東西問題における同調率の差を完全に補完している。

これら三派の中ではもつとも左翼にあるベオグラード派の東西問題に対する投票傾向は、数字の示す限りでは、「東寄りの

「植民地問題」では、米ソとの同調率はそれぞれ三二%と九二%であり、実に六〇%もの隔差が生じていることは注目に値い

中立主義」である。南北問題に対する反応はAAブロックの中ではもつとも反西欧的で、従つてまた反アメリカ的である。

する。

25 多数派の投票態度と七回一致したならば、必燃涼長= $\frac{7}{10} imes 100 = 70$ (%)である。 多数派率とは、 反対、棄権と三種類の投票態度のうち、もつとも多数の投票を集めた投票態度を指す。例えば、十回の投票のうち、 ある国もしくはあるブロックの投票態度が、総会多数派の投票態度と一致する率である。但し、ここでいう多数派とは、賛 ある国の投票が総会の

26 は三分の二の多数をとつたものが majority となる。See Hovet, Africa in the U. N., p. 147 第一八総会における八つの「植民地問題」に関する投票のうち、日本がAAブロックの多数派に属したのはわずか一回だけであるが、 七回もAAブロックの多数派に属している。 例え

これと異り majority を decision-making majority の意味にとつており、従つてある場合には投票の過半数を、

またある場合に

ホベットは、

27 投票同調率は、 国家間或はブロック間の国連総会における投票上の親密度を示すためのもので、 同一票 (投票態度が同一の場合)、 反対票

五結

語

九四五年六月二十六日、

は、 ウスに参集した国連の創立者達の中の誰一人として今日の国連の姿を予測しえたものはなか つ た であろう。 それほど国連 この二〇年の間にその規模においても機能においても著しい変貌を遂げてきた。 国連憲章がその前文において、

平和を願う人類の希望と期待をこめて国連憲章が採択された時、サンフランシスコのオペラハ

アジア・アフリカ・ブロックと国際連合

六九 (八一三)

持するために……ここに国際連合という国際機構を設けるもので ある」 と 宣言しているごとく、 らの一生のうちに二度まで言語に絶する悲哀を人類に与えた戦争の惨害から将来の世代を救い、 もなく始つた米ソの対立のため、五大国協調の上にはじめて成立しうる安保理事会は継続的な麻痺状態に陥つた。 平和と安全の維持にあつたが、憲章はこの重要な任務の遂行を安保理事会に期待していたのである。しかるに、 ……国際の平和と安全を維 国連の第一の目的と任務

この安保理事会の麻痺は、勢い総会における職務の増加となつて現われ、一九四八年の第三総会には早くも総会の第七番

保理事会が有効にその機能を果しえない場合には、二十四時間以内に緊急特別総会を開き、強制力こそないが、安保理事会 障に関する問題を受持つこととなつた。安保理事会の麻痺が国連に与えた第二の、そしてもつとも重大な産物は、 来「スエズ事件」、「ハンガリー事件」、「レバノン事件」、「コンゴー事件」 といった最重要の 国際紛争に対して 四度発動さ に代つて紛争の平和的解決やそれに必要な集団的措置をとることが可能になつた。総会に与えられたこの重要な権限は、 年の第五総会における「平和のための統合決議」の成立である。これにより国連は、国際の平和が危機に直面し、 目の委員会として「アド・ホック委員会(後の特別政治委員会)」が誕生し、第一委員会の処理し切れなくなつた政治と安全保 国連緊急軍も三度組織される等屢々利用され国際の平和に貢献してきた。 しかも安 爾

争の解決に際しての無能さは、計らずも中小国を国際政治の舞台に再び登場させることとなつた。この中小国の中でもつと の強化は可能となつたのである。二大陣営の力の対立が生んだ国際社会におけるバランス・オブ・パワーの永続化と国際紛 会をみて、 言すれば、大国中心主義に対する不信の表明であつた。戦争の脅威に直面して、何らの有効な措置をもとりえない安保理事 と安全の維持に貢献しえなくなつたことに基くのであるが、それは同時に、国連加盟中小国の安保理事会に対する不信、 この二つの例にみられる総会の権限の著しい増大は、安全保障理事会の機能が麻痺し、その本来の任務である国際の平和 平和維持のため何らかの実効的手段を国連に確立しようという中小国の圧倒的支持をうけてはじめて総会の権限 换

も重要な役割を果したのが本論で取上げたAA諸国であるが、このAA諸国の国連における役割の増大は、 この国連総会の

権限の拡大と関連して考えられてこそ初めて正しい評価をうけることができよう。

場してきた。このブロック・ヴォーティングそのものは、ラテン・アメリカ諸国やアラブ連盟諸国の間では、 の創立当初から存在していたが、それが一九五五年頃から国際政治的意義をもつものとして特に注目されはじめたのは、 い。そして、この投票を有利に導くための政治的技術として、ブロック・ヴォーティングという新しい現象が国連総会に登 定する(勧告であつて強制ではないが)機関であるが、 われたもつとも注目すべき現象がブロック政治であつた。 このように公式の手続きを経て確立された国連総会の地位の強化、 加盟各国の 総会における比重が投票におかれることはどうしても否めな 国連総会は、 権限の増大とともに、国連を舞台とする国際政治に現 国際的諸問題を討議し、投票によつてその態度を決 ほとんど国連

益々減少している。このようにブロック政治は、今日国連総会の舞台裏において事実上総会における投票を動かしている非、 義に拘泥しているかにみえる西欧先進国に対する憤激から出た後進国の大国主義に対する挑戦のための団結に始つたことは 公式ながら非常に重要な要素となつているが、そもそもこの国連におけるブロック政治の重要性を認識せしめたAA諸国の、、、、 は 論において指摘したように、 ブロック化そのものが、益々その対立を激化し戦争の脅威を惹起する米ソ両大国に対する不信と、依然としてその植民地 る投票の安定性が絶対のものでなくなつた事による。 西側は必ずしも投票に勝ちえなくなり、事実前節において、詳しく述べたように、そのご年とともに西側の多数派率は **AAブロックの増加によつて、従来欧米諸国の圧倒的優位の中に成立していた国連総会におけ** すなわちAAというヴォーティング・ ブロック の 態度如何によつて

次に、 国連加盟AA諸国の急増が、 国連における東西両陣営のバランスにどのような影響を与えているか、 もまた重要な

記憶されねばならない。

問題の一つである。 かつては国連における孤立者の悲哀をかこち、 「国連は米国が自らの意思を課する機関である」

アジア・アフリカ・ブロックと国際連合

あるのに対して、 する以外に途のなかつたソ連も、 しうる。即ち、 増大の主因がAA諸国の増加にあることは、「麦十」 のAA諸国のアメリカ、 ごとく最近三つの総会における多数派率の平均は五○%を越し、アメリカのそれを凌駕するに至つている。 AA諸国五七ヵ国中ソ連と八○%以上の投票同調率を示す国は七ヵ国、同じく七○%以上の国は二四ヵ国で アメリカと八○%以上の同調率を示す国はわずか二ヵ国 AAブロックの勢力が増大するとともに孤立者の地位から解放され、 (トルコ、日本)、また七○%以上の国も五 ソ連との投票同調率の比較により容易に推察 「麦七」 に示される ソ連の多数派率 カ国に

つていることを示すものである。 おける事件別平均多数派率を示した「表十二」でも明かなように、東西問題では今日においてもアメリカが圧倒的優勢を誇 を明かにしている。 的解決」や「その他」の問題に該当する東西両体制間の諸問題については、 前述のようなAAブロックとの同調率平均におけるソ連のアメリカに対する優越という事実にもかかわらず、 「表十一は」、このAAブロックのアメリカ、 このことは、 アメリカの総会における多数派率が著しく減少しはじめた第一五総会以後の四つの総会に ソ連との投票同調率を、更に事件別に分析してみたものであるが、 アメリカの方が依然としてソ連より高い同調率 「紛争の平和

が高い。

過ぎないし、

五七ヵ国の平均をとつてみても、

ソ連の六二%に対し、アメリカとは四八%と明かにソ連との投票同調率の方

五六%と、 南北問題におけるAAブロックとの同調率をみると、「植民地問題」では八二%対三九%、「人権・人種問題」では八三%対 ができたのは、 いずれも圧倒的にソ連の同調率の方が高い。 その南北問題におけるAAブロックとの協調が非常に高いことによる。再び「表十一」を参考にして米ソの このAAブロックとの同調率の差が、「表十二」 の示す南北問題に

東西問題ではこのように一〇%前後の多数派率を示すに過ぎないソ連が、全体としてはその多数派率を著しく高めること

おける米ソ両国の多数派率の差となつて表われているとみてよい。

しかしながら、

南北問題におけるAAブロックとソ連の投票同調率の高さは、

これらの問題

それ

				(第十五一十八総会平 均) ————————————————————————————————————										
国	名		事件 	平和的解决	植民地	核・軍縮	人種・人権	その他						
日			本	% 89	31	83	50	69						
7	×	IJ	カ	89	21	42	40	56						
7			連	11	79	42	70	6						

この一般的原理は、

今日の日本の国連における投票態度の評価に際しても普遍妥当性をもつよ

識が、 支持を続けるとすれば、 求に反した行動をとり、 を意味しない。 従つてAAブロックとソ連の同調率の高さは、 であり、このAAブロックの主張にどの程度接近しているかを米ソの同調率は示すのである。 ことによるというべきであろう。 は、これらの問題で、 でAAブロックがアメリカよりソ連の態度に同調的であつたことを意味するのではない。 逆に他の国際政治の諸局面に重大な影響を与えるようになる可能性も大である。そして しかし、 ソ連の方がアメリカよりも遥かにAAブロックの立場に同調的であつた 国連における投票で常に同一行動をとつたという一種の運命共同体意 その間にソ連が、 西欧の友邦との古い絆に縛られたアメリカが常にAA諸国の政治的 南北問題に関する限り、 反植民地主義という共通の目的 ソ連がAA諸国の投票行動に影響力をもつこと 主体的立場にあるのはAAブロック からAA諸国に強

欲

は うに思われる。 最後にAAブロック内部の問題かある。 一一ヵ国から五七ヵ国へと拡大する過程において、 その一つはその分裂的傾向についてであつて、 AAブロック内に主として冷戦への対 筆者

応の仕方によつてベオグラード派、

ブラザビル派、

軍事同盟派の三サブ・ブロックが生じたこ

く阻害していることは明かで、 ものではない。そして、このような分裂的傾向が、 とを指摘したが、このことは更に多くのグループがAAブロック内に存在することを否定する 一九六四年秋に予定されている第二回非同盟会議や、 AAブロックの国連における影響力を著し 一九六五

アジア・アフリカ・プロックと国際連合

七四

年四月に開かれることとなつた第二回AA諸国会議も、たがのゆるんだAA諸国の団結を再び締め直そうとするものであろ AAブロック内、 特にベオグラード派とブラザビル派との間の国連における投票行動の同調度如何の問題がAAブロッ

クの団結と影響力にとつて今後の第一の課題となるであろう。

が、しかし、総会の決議は勧告であつて、強制力ある命令ではない。真の勝利、即ち決議に実効性をもたせるためには、そ の決議が説得力をもつことが必要であり、それが国際道徳に叶つたものでなければならない。徒らに過激な内容をもつ決議 とが真の勝利ではないことの認識についてである。総会における投票に勝つことは、それ自身相当な意味をもつものである 国連におけるAAブロックに当面する第二の問題点は、 総会における投票に勝つ (過半数もしくは三分の二の多数を制する) こ

この点を充分に反省するならば、数においてはすでに支配的となつた AAブロックの国連における地位と影響力は今後一層重要なものとな

を通過せしめても、それが実効力を持たねば真の勝利とはならない。

つていくであろう

割には、投票に勝つ率が高かつたのは、このような理由によるものであつた。 ることによつて充分対抗しえたのである。西側諸国が多数派率における滅少の とするAA諸国側の議案に対し、現状維持派の西側は投票の三分の一を確保す かわらず議案が否決されることも屢々ある。南北問題でも、現状を打破しよう は、重要問題では三分の二の多数を必要とし、従つて、過半数を占めたにもか

多数派率は、総会における投票に勝つ率を意味しない。投票に勝つために

投票に勝つ率を今仮に満足率と呼ぶとして、主要各国の満足率を比較してみた

のが「麦十三」である。

	表·	十三 :	主要名	国の治			
アルゼンチン	スウェーデン	イン	y	アメリ	Ħ	国名	***
Ý	_ ´>_	ド	連	カ	本	_	総会
92	91	50	23	83	% 77		(11)
90	72	54	24	94	88		(12)
100	77	54	24	100	100		(13)
94	69	60	44	82	100		(14)
90	67	43	38	81	82		(15)
94	71	65	40	74	90		(16)
100	89	92	42	75	92		(17)
100	73	94	81	56	90		(18)
94	74	64	39	82	90	平	均